２０２２年度
大学院奨励研究員研究報告書

2023年　3月　31日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	栗原　正東　　印

指導教員

所属・職名	文学部・教授
氏　　名	志村　洋　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	日本近世期における修験道支配確立に関する研究
採用期間	２０２２年　４月　１日　～　２０２３年　３月　３１日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先：　所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目				
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁	

雑誌論文	著者名		論文題目				
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁	

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	大阪歴史学会	開催地	オンライン
題目	近世期紀州藩における在地修験の宗教活動と寺院経営	発表年月日	2022年10月31日

学会名	和歌山地方史研究会	開催地	和歌山大学松下会館
題目	近世期紀州における門跡入峯の展開―大峯・葛城修験を事例に―	発表年月日	2023年3月19日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（３０００字程度）

申請者の博士論文は畿内近国に所在する修験教団と在地修験組織を対象に、教団による在地支配体制の確立とその展開について検討し、中世からの支配システムの連続性・非連続性を論じ、近世的宗教支配の特質を解明することを目的とする。

主な方向性として①近世前期（特に寛永～元禄期）における修験教団による支配成立までの意図・動向、②近世期を通じた在地修験の活動形態と本山との関係性、を解明する。

本研究では①に焦点を置いた。まず、(1) 近世前期における本山派・当山派による支配領域獲得について検討した。17世紀中葉（寛永～寛文期）を通じて本山同士による行所をめぐる争論が複数起こり、本山・当山派の支配地域が段階的に確定されていった。本山・当山派ともに門跡および院家・大先達であった寺社所蔵史料を用いて争論の様相を分析し、当該期の支配編成確立に至る本山間の動向を分析した。次に、(2) 本山による在地修験統制の動向を検討した。17世紀後半（寛文～元禄期）に本山・当山派は、ともに宗派内法度・掟書を発給して在地修験に対する遵守項目・筋目関係形成・上下統属関係などの支配方法（システム）を構築した。本山、在地修験の所蔵史料より法度・掟書を抜粋して比較分析し、他面で在地修験側に残る記録類より、当該期の内部状況、本山への奉納銭出納や門跡入峯の変遷を辿ることで本山・在地双方の視点から支配システムが在地へ浸透した過程を明らかにした。

しかし、本年度は (1) がコロナ禍による現地史料閲覧制限のため当初の予定より遅れが生じた。そのため、博士論文の指導教員と相談の上博士論文提出を2023年度に持ち越すこととした。一方で当初の予定では、(2) の在地修験の対象に中世以来一山寺院（兼学宗教組織）であった熊野三山本願所のみを想定していたが、現地史料閲覧制限を受けて刊行史料より当該項目の収集を行った結果、熊野三山と同様に一山寺院であった吉野修験金峯山寺及び関連寺社を新たな事例として組み込むことにした。この成果は現在執筆中であり、本年度中に掲載する見込みで博士論文第1部第3章、第2部第5章とする予定である。

次に博士論文の概要と進捗状況を述べる。

第一部では①を中心に論じる。第 2 章は熊野三山新宮本願所を対象に、教団支配確立期の教団掟書、本願所内部の動向を分析し、新宮本願所は本願所九ヶ寺内では当山派との因縁による地位確立、本山派としての活動を並行して行っていたことを論じ、教団による一方的な強制的支配編成ではなく、被支配側（新宮本願所）の恣意性が介在していた可能性を明らかにする。第 3 章では教団秩序形成において門跡権威の顕在化させる目的で復活したとされる門跡入峯について、在地修験側（葛城・吉野）の受入体制について明らかにする。第 2 章は修士論文を元に既発表報告済であり、第 3 章は一部既発表論文である。ここに (1) の根幹である本山・当山争論の動向を組み込む。

第二部では②を中心に論じる。第 4 章では紀州に所在する葛城修験の行場運営を担った本山派在地別当・迎之坊を対象に、行場は中世以来の信仰度合いにかかわらず支配層である本山・藩から営為を受けて安堵されたことを論じる。寺社領とは異なり行場はあくまで村落共同の杣山であったため村民による抵抗もあり、行所の運営・地域整備は在地修験によって段階的に確立したことを指摘する。第 5 章では宝暦 14（1764）～年安永 4（1775）年にかけて葛城修験行場のひとつである弁財天山と付随する山林・堂社・什物の所持をめぐり争論を分析する。この争論を通じて迎之坊（在地修験組織）と本山の関係性を論じる。第 6 章では金峯山寺周辺の行所をめぐる本山（聖護院、醍醐寺三宝院）、諸先達、周辺村落による所有論争を分析し、第 6 章と併せて行所運営を通じて幕藩行政と修験の位相、修験教団と在地修験による行所運営の意義を論じる。第 7 章では迎之坊らによる門跡入峯の差配を分析する。紀州藩は「馳走」として門跡入峯の対応を行うが、その情報は在地別当を「媒介」として把握し、在地別当は入峯に際して自身が管理する行所整備を超えて活動したことを論じる。第 8 章では京都愛宕山の末寺であった紀州・円珠院を事例に紀州藩による領内寺院秩序形成の動向を分析する。紀州藩による領内寺院秩序への編入は強硬姿勢とされてきた従来の見解に対して、その交渉過程を分析し、藩・本山の関係性を論じる。第 4・8 章は既発表済論文であり、第 5・7 章は既発表済で、第 5 章は現在学術雑誌へ投稿をしている。第 7 章も近日中に投稿する予定である。第 6 章の史料・文献収集も概ね完了している。また、序章と終章については本論の執筆と並行して進めているところである。

今後は博士論文執筆完了のために第1部第1章、2章の報告準備に専念する。とりわけ、本研究該当部分である第1章に関しては博士論文の主要部分であるため、現地史料収集と併せて学会などで報告、議論を尽くすように努める。来年度は以上の成果を踏まえて夏までに博士論文第一章部分（論文2本分）を執筆投稿し、既発表論文3本、現在投稿中の論文2本を併せて博士論文を提出予定である。

【博士論文目次（予定）】
序論　本研究の方法と課題
第1部　近世期修験教団による統制と編成
第1章　修験教団による在地支配の展開―本山・当山派争論を中心に―
第2章　一七世紀一山寺院の支配体制と編成―熊野三山新宮本願所を事例に―
第3章　門跡入峯の成立と展開―葛城・吉野を事例に―
補論　近世熊野の比丘尼に対する認識と変容
第2部　修験教団による支配と在地修験の活動形態
第4章　一七世紀葛城修験の行所確立―本山派迎之坊を対象に―
第5章　近世中・後期葛城修験行所支配をめぐる本山・対藩関係
第6章　修験教団と地域社会の対立―吉野修験における道苅小屋一件を中心に―
第7章　一八～九世紀入峯行為をめぐる地域的対応
第8章　紀州藩領内における寺院編成と本山派―円珠院を事例に―
結論と展望　修験教団からみる近世宗教支配の特質